

令和元年度 農作物病害虫発生予察情報 発生予報 第4号（8月予報）

令和元年7月30日 秋田県病害虫防除所

| | |
|--|---|
| 【内容】 Ⅰ. 予報の要点 Ⅱ. 主要病害虫の向こう1か月の予報 Ⅲ. 発生予報と防除対策 Ⅳ. 気象予報 Ⅴ. 気象データ Ⅵ. 用語の説明 | 【問合せ先】 秋田県病害虫防除所 018-881-3660 秋田県農業試験場 018-881-3326 秋田県果樹試験場 0182-25-4224 かづの果樹センター 0186-25-3231 天王分場班 018-878-2251 |
| 【お知らせ】 ◇今回の予報対象期間は8月を主とします。次回の発表予定は令和元年8月27日です。 ◇病害虫発生予察情報は秋田県病害虫防除所のホームページで閲覧できます。 https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/ ◇短期暴露評価により使用方法が変更された農薬があります。使用制限となる農薬の変更情報は秋田県のホームページで確認してください。 https://www.pref.akita.lg.jp/suiden/ ◇農薬の登録内容は随時更新されますので、防除薬剤については指導機関に相談してください。最新の農薬登録状況の検索や、登録・失効農薬情報は独立行政法人農林水産消費安全技術センターのホームページで閲覧できます。 http://www.famic.go.jp/ ◇病害虫発生予察情報の発表をお知らせするメールマガジンはこちらのホームページで読者登録できます。 http://www.e-komachi.jp/ | |

I. 予報の要点

| | |
|-----|--|
| 水 稲 | 穂いもちの発生量はやや多いと予想されます。防除対策情報第5号を参照して、ほ場の発病状況を確認し、穂いもち防除を徹底してください。斑点米カメムシ類の発生量は多いと予想されます。防除対策情報第6号を参照して、出穂期10日後頃の茎葉散布剤による防除と散布当日から7日後までの畦畔や農道の草刈りを必ず実施してください。コバネイナゴの発生量は多いと予想されます。要防除密度に達したほ場では、7月下旬にトレボン剤またはMR・ジョーカー剤で畦畔を含めて防除してください。 |
| 大 豆 | ダイズサヤタマバエの発生量は多いと予想されます。着莢期にアルバリン剤・スタークル剤、スミチオン乳剤、トレボン乳剤で防除してください。食葉性鱗翅目幼虫の発生量は多いと予想されます。幼虫の発生初期にエルサン乳剤、トレボン乳剤、フェニックスフロアブルのいずれかで防除してください。 |

| | |
|-----|--|
| 野 菜 | <p>ねぎの病害では黒斑病・葉枯病の発生量が夏どり、秋冬どりで多いと予想されます。発病を確認した場合は展着剤を加用して防除してください。害虫ではアザミウマ類の発生量が夏どりで多い、秋冬どりでやや多いと予想されます。多発すると防除効果が劣るので発生初期から防除してください。</p> <p>きゅうりでは斑点細菌病の発生がやや多いと予想されます。発病部位を除去した上で防除に努めて下さい。また、ワタヘリクロノメイガの発生もやや多いと予想されます。老齢期になると防除効果が劣るので若齢期のうちに防除して下さい。</p> <p>トマトの害虫ではヒラズハナアザミウマの発生が多いと予想されます。被害果の摘果を行うとともに薬剤を花房に付着するよう丁寧に散布して下さい。えだまめの害虫ではツメクサガの発生が多いと予想されます。老齢期になると防除効果が劣るので若齢期のうちに防除してください。</p> |
| 果 樹 | <p>りんごではナミハダニの発生が多いと予想されます。発生状況をよく観察し、遅れないように殺ダニ剤を散布してください。コロマイト乳剤は高温時に使用すると黄変落葉のおそれがあるため注意してください。</p> <p>なしではナミハダニの発生が多いと予想されます。発生状況をよく観察し遅れないように殺ダニ剤を散布してください。コロマイト水和剤は高温・乾燥時に使用すると黄変落葉のおそれがあるため注意してください。</p> |

Ⅱ. 主要病害虫の向こう1か月の予報

| 作目名 | 病害虫名 | 対象地域 | 発生時期 感染時期 | 発生量・感染量 | |
|--------------|--|------|--------------|----------------|----------------|
| | | | | 現況 | 予報 |
| 水 稲 | 穂いもち | 全県 | 平年並 | — | やや多い |
| | 紋枯病 | 全県 | — | 少ない | やや少ない |
| | セジロウンカ (第2世代幼虫) | 全県 | 早い | やや少ない | やや少ない |
| | 斑点米カメムシ類(第2世代成虫) (アカスジカスミカメ) | 全県 | 早い | 多い | 多い |
| | (アカヒゲホソミドリカスミカメ) | | 早い | 多い | 多い |
| | フタオビコヤガ (第3世代幼虫) | 全県 | やや早い | やや少ない | 少ない |
| | アワヨトウ (第2世代幼虫) | 全県 | — | — | 平年並 |
| コバネイナゴ | 全県 | — | 多い | 多い | |
| 大 豆 | 紫斑病(子実) | 全県 | やや早い | — | やや少ない |
| | アブラムシ類 (ジャガイモヒゲナガアブラムシ) (ダイズアブラムシ) | 全県 | 遅い やや遅い | やや少ない やや少ない | やや少ない やや少ない |
| | 吸実性カメムシ類 (ホソヘリカメムシ) | 全県 | — | — | やや多い |
| | ウコンノメイガ | 全県 | やや遅い | やや少ない | やや少ない |
| | フタスジヒメハムシ | 全県 | — | — | やや少ない |
| | マメシンクイガ | 全県 | 平年並 | — | やや少ない |
| | ダイズサヤタマバエ | 全県 | — | — | 多い |
| | 食用性鱗翅目幼虫 (ツメクサガ) | 全県 | — | 多い | 多い |
| ねぎ (夏どり) | 黒斑病・葉枯病 | 全県 | — | 多い | 多い |
| | アザミウマ類 (ネギアザミウマ) | 全県 | — | やや多い | 多い |
| | ネギハモグリバエ | 全県 | — | やや少ない | 平年並 |
| | シロイチモジヨトウ | 全県 | — | — | やや多い |
| ねぎ (秋冬どり) | 黒斑病・葉枯病 | 全県 | — | 多い | 多い |
| | アザミウマ類 (ネギアザミウマ) | 全県 | — | 少ない | やや多い |
| | ネギハモグリバエ | 全県 | — | やや少ない | 平年並 |
| | シロイチモジヨトウ | 全県 | — | — | やや多い |

| 作目名 | 病害虫名 | 対象地域 | 発生時期 感染時期 | 発生量・感染量 | |
|---------|-----------------------|----------|--------------|---------|-------|
| | | | | 現況 | 予報 |
| きゅうり | べと病 | 全県 | — | 平年並 | 平年並 |
| | うどんこ病 | 全県 | — | 多い | やや多い |
| | 褐斑病 | 全県 | — | やや少ない | 平年並 |
| | 灰色かび病 | 全県 | — | — | 平年並 |
| | 斑点細菌病 | 全県 | — | 平年並 | やや多い |
| | 炭疽病 | 全県 | — | やや少ない | 平年並 |
| | アブラムシ類 (ワタアブラムシ) | 全県 | — | 平年並 | やや多い |
| | ワタヘリクロノメイガ | 全県 | — | やや少ない | 平年並 |
| | コナジラミ類 (オンシツコナジラミ) | 全県 | — | — | やや多い |
| | アザミウマ類 | 全県 | — | — | やや多い |
| トマト | 灰色かび病 | 全県 | — | やや少ない | やや少ない |
| | 葉かび病 | 全県 | — | 多い | やや多い |
| | ヒラズハナアザミウマ | 全県 | — | 多い | 多い |
| | オオタバコガ | 全県 | — | 多い | 多い |
| えだまめ | べと病 | 全県 | — | — | 平年並 |
| | ツメクサガ | 全県 | — | 多い | 多い |
| | ダイズサヤタマバエ | 全県 | — | — | やや多い |
| りんご | 斑点落葉病 | 全県 | — | 多い | やや多い |
| | 黒星病 | 全県 | — | 少ない | やや少ない |
| | 炭疽病 | 全県 | 平年並 | 平年並 | やや少ない |
| | 輪紋病 | 全県 | — | — | 平年並 |
| | 褐斑病 | 全県 | — | 平年並 | 平年並 |
| | シンクイムシ類 | 県北部 | — | やや少ない | 平年並 |
| | | 県中央部・県南部 | — | やや少ない | 平年並 |
| | ナミハダニ | 全県 | — | 多い | 多い |
| | リンゴハダニ | 全県 | — | やや少ない | 平年並 |
| | 果樹カメムシ類 | 全県 | — | 平年並 | 平年並 |
| キンモンホソガ | 全県 | やや早い | 平年並 | やや多い | |
| なし | 黒星病 | 県北部・県中央部 | — | 平年並 | 平年並 |
| | 黒斑病 | 県北部・県中央部 | — | 平年並 | 平年並 |
| | 輪紋病 | 全県 | — | — | 平年並 |
| | シンクイムシ類 | 県北部・県中央部 | — | 少ない | やや少ない |
| | ナミハダニ | 県北部・県中央部 | — | 多い | 多い |
| | リンゴハダニ | 県北部・県中央部 | — | やや少ない | 平年並 |
| | 果樹カメムシ類 | 県北部・県中央部 | — | やや多い | やや多い |
| ぶどう | べと病 | 県南部 | やや遅い | 平年並 | 平年並 |
| | 灰色かび病 | 県南部 | — | やや多い | やや多い |
| | 晩腐病 | 県南部 | やや早い | 平年並 | 平年並 |
| | チャノキイロアザミウマ | 県南部 | — | 平年並 | やや多い |

Ⅲ. 発生予報と防除対策

A 水稻

| 病虫害名 | 予報内容 | |
|---------|----------|----------------|
| | 発生時期 | 発生量 |
| 1. 穂いもち | 平年並（前年並） | やや多い（前年よりやや多い） |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量、日照時間はいずれもほぼ平年並と予報されている（ /±）。
 - イ、各地域振興局の水稻定点調査によると、7月25日現在のあきたこまちの葉数は12.4葉（平年12.2葉）で平年並で、葉緑素計値は低かった（±/－）。
 - ウ、7月1～2半旬の全般発生開始期確認調査における葉いもちの発病地点率は16.3%（平年26.5%）でやや低く、1調査単位当たりの散在分布数は0.08個（平年0.08個）で平年並であった（ /±）。
 - エ、7月1半旬以降、BLASTAM（アメダスデータを用いた葉いもち発生予測プログラム）判定において感染好適日が断続的に出現しており、また、予察および防除適期決定ほにおける病斑増加調査では7月2半旬以降、病斑が急増している地点も見られる（ /+）。
 - オ、7月4～5半旬の抽出ほ場調査における葉いもちの発病株率は11.3%（平年2.8%）、発病地点率は43.8%（平年14.4%）でいずれも高かった（ /+）。
- また、上位葉の発病株率は0.21%（平年0.22%）、発病地点率は3.8%（平年2.7%）でいずれも平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、7月30日発行の防除対策情報第5号を参照する。

| 病虫害名 | 予報内容 | |
|--------|------|-----------------|
| | 発生時期 | 発生量 |
| 2. 紋枯病 | － | やや少ない（前年よりやや多い） |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い（ /+）、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、各地域振興局の水稻定点調査によると、7月25日現在のあきたこまちの茎数は理想生育量の目標値に達しているほ場が多い（ /±）。
- ウ、7月4～5半旬の抽出ほ場調査における発病株率は0.8%（平年1.7%）、発病地点率は6.3%（平年15.3%）で、いずれも低かった（ /－）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、穂ばらみ期の発生状況を確認し、発病株率が15%を超える場合は出穂直前～穂揃期にバシタック剤、バリダシン剤、モンカット剤、モンセレン剤のいずれかを株元に到達するように茎葉散布する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|-----------------------|---------|-------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 3. セジロウンカ (第2世代幼虫) | 早い (-) | やや少ない (前年並) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (-/)。

イ、秋田市予察ほにおける初飛来日は7月1日 (平年7月4日) でやや早かった (-/)。

ウ、7月4～5半旬の抽出ほ場調査におけるすくい取り数は0.0頭 (平年0.8頭)、粘着板法による10株当たり幼虫数は0.3頭 (平年4.3頭) でいずれもやや少なかった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、第2世代幼虫の防除適期 (ふ化盛期) は8月中旬と予想されるが、斑点米カメムシ類との同時防除が可能である。

イ、葉色が濃いほ場で多発する場合がありますので注意する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|--|---|--|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 4. 斑点米カメムシ類 (アカスジカスミカメ) (アカヒゲホソミドリカスミカメ) (第2世代成虫) | 早い (前年よりやや早い) 早い (前年よりやや早い) 早い (前年より早い) | 多い (前年よりやや多い) 多い (前年より多い) 多い (前年並) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (-/±)。

イ、7月4～5半旬の抽出ほ場調査における畦畔での斑点米カメムシ類すくい取り数は3.8頭 (平年3.5頭) で平年並、発生地点率は45% (平年35%) で高かった (/+)。水田内での斑点米カメムシ類のすくい取り数は2.1頭 (平年0.5頭) と多く、発生地点率は19% (平年15%) でやや高かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、7月30日発行の防除対策情報第6号を参照する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|------------------------|----------|-----------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 5. フタオビコヤガ (第3世代幼虫) | やや早い (-) | 少ない (前年よりやや少ない) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (-/±)。

イ、7月4～5半旬の抽出ほ場調査における第2世代幼虫の水田内すくい取り数は0.2頭 (平年3.1頭) でやや少ない、発生地点率は8.8% (平年37.8%) で低く、食害株率は0.3% (平年19.2%) でやや低かった (/-)。

ウ、第1世代成虫の予察灯における誘殺数は0.7頭 (平年11.8頭) で少なかった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、8月上旬の中齢幼虫 (体長1～1.5cm) が主体の時期に上位2葉を調査し、食害株率が100%で食害度が25を超えない場合は防除の必要はない。

- イ、例年発生が多いほ場で、有効な育苗箱施用剤を使用していない場合やこれまで防除を行っていないほ場では多発に注意する。
- ウ、葉色が濃い、山間部などの風通しの悪いほ場で多発する場合がありますので注意する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|------------------|---------|---------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 6. アワヨトウ（第2世代幼虫） | — | 平年並（前年よりやや多い） |

(1) 予報の根拠

- ア、侵入世代成虫の飛来量は多かった（ /+）。
- イ、6月6半旬の小麦巡回調査において1地点で幼虫の発生が確認されたが密度は低かった。水稲、牧草地巡回調査では発生が確認されなかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、防除を必要とする水田は少ないと見込まれるが、葉色が濃い水田、いもち病によるズリコミ田、苗代跡、水害跡など軟弱な稲に発生する機会が多いため、注意深く観察する。また、群生相となった黒化型の幼虫が確認された場合は直ちにスミチオン乳剤で防除する。
- イ、本種は突発的に発生することがあるので、今後の予察情報に注意する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|-----------|---------|---------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 7. コバネイナゴ | — | 多い（前年並） |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ、7月4～5半旬の抽出ほ場調査における水田内すくい取り数において、要防除密度を超えた地点率は5.0%（平年0.6%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、要防除密度は株当たり0.5頭以上（穂ばらみ期まで）であり、これは本田における20回のすくい取りで100頭以上である。
- イ、要防除密度に達したほ場では、7月下旬にトレボン剤またはMR. ジョーカー剤で畦畔を含めて防除する。

8. その他病害虫の発生予報と防除対策

| 病害虫名 | 発生時期 | 発生量 | | 防除上注意すべき事項 |
|----------------------------|------|-------|-------|--|
| | | 現況 | 予想 | |
| ニカメイガ (2回発生地帯の 第2世代) | — | やや少ない | やや少ない | 7月4～5半旬の抽出ほ場調査において第1世代の被害株率はやや低く、フェロモントラップにおける総誘殺数は少ない～平年並であった。 防除が必要なほ場は少ないと見込まれる。 |
| コブノメイガ | — | 平年並 | 平年並 | 7月4～5半旬の抽出ほ場調査において第1世代による被害が一部ほ場で確認されたが、防除が必要なほ場は少ないと見込まれる。 |
| トビイロウンカ | — | 平年並 | 平年並 | 7月23日現在、飛来は確認されていない。 7月4～5半旬の抽出ほ場調査において発生は確認されなかった。 |
| ヒメトビウンカ | — | 少ない | 少ない | 7月4～5半旬の抽出ほ場調査におけるすくい取り数は少なかった。斑点米カメムシ類との同時防除が可能である。 |
| ツマグロヨコバイ | — | 平年並 | 平年並 | 7月4～5半旬の抽出ほ場調査において発生は確認されなかった。 |

B 大豆

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|-------------|----------|-------------|
| | 感 染 時 期 | 感 染 量 |
| 1. 紫斑病 (子実) | やや早い (-) | やや少ない (前年並) |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い(-/)、降水量はほぼ前年並と予報されている(/±)。
- イ、各地域振興局の調査によると、播種盛期は6月12日(前年6月10日)であったことから、開花期は前年並と見込まれる(±/)。
- ウ、前年収穫期の被害粒率はやや低かった(/-)。
- エ、種子塗沫処理による防除が普及している(/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、開花期20~30日後にアミスター20フロアブルなどで防除する。ただし、着莢期に降雨が多い場合は1回目防除の約10日後に追加防除を行う。
- イ、耐性菌出現回避のため、同系統の薬剤の連用を避ける。
- ウ、薬剤は莢によく付着するように散布する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---|---------------------------|--------------------------------|
| | 発 生 時 期 (発 生 盛 期) | 発 生 量 |
| 2. アブラムシ類 (ジャガイモヒゲナガアブラムシ) (ダイズアブラムシ) | 遅い (前年並) やや遅い (前年より遅い) | やや少ない (前年並) やや少ない (前年より少ない) |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている(ジャガイモヒゲナガアブラムシ(-/-)、ダイズアブラムシ(-/+))。
- イ、7月5半旬の秋田市予察ほにおける発生株率はジャガイモヒゲナガアブラムシが0%(前年2.8%)、ダイズアブラムシも0%(前年3.9%)でいずれもやや低かった(/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、発生が多く見られる場合はアグロスリン乳剤などで防除する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------------------------|---------|------------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 3. 吸実性カメムシ類 (ホソヘリカメムシ) | - | やや多い (前年よりやや少ない) |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い(/+)、降水量はほぼ前年並と予報されている(/±)。
- イ、前年の収穫期の被害粒率は高かった(/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、マメシンクイガとの同時防除に努める。ただし、プレバソンフロアブル5を除く。
- イ、薬剤は莢によく付着するように散布する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|------------|----------|-------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 4. ウコンノメイガ | やや遅い (－) | やや少ない (前年並) |

(1) 予報の根拠

ア、7月4半旬の秋田市予察ほ調査において産卵は確認されていない (平年産卵盛期7月3半旬) (+ /)。

イ、7月4～5半旬の巡回調査における叩き出し成虫数は0.3頭 (平年1.8頭)、茎当たり卵塊数は0.01個 (平年0.07個) でいずれもやや少なかった。予察灯における5月1半旬～7月4半旬の総誘殺数は、6頭 (平年9.8頭) で前年並であった (/－)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害は生育が旺盛なほ場で多い傾向にあるので注意する。

イ、7月6半旬には場全体で40～60茎の葉巻数を調査して、茎当たり葉巻数が1.3個以上の場合は、8月上旬までにカスケード乳剤、スミチオン乳剤などで防除する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|--------------|---------|-------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 5. フタスジヒメハムシ | － | やや少ない (前年並) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い (/+)、降水量はほぼ前年並と予報されている (/±)。

イ、前年の収穫期の被害粒率はやや低かった (/－)。

ウ、種子塗沫処理による防除が普及している (/－)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、マメシクイガとの同時防除に努める。ただし、プレバソフロアブル5を除く。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|-----------|-----------|-------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 6. マメシクイガ | 前年並 (前年並) | やや少ない (前年並) |

(1) 予報の根拠

ア、成虫の羽化は日長に大きく影響されるため、発生時期の変動は小さい (± /)。

イ、前年の収穫期の被害粒率はやや低かった (/－)。

ウ、各地域振興局の調査によると、播種盛期は6月12日 (平年6月10日) であったことから、開花期は前年並と見込まれる (± /)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、連作により密度が高まるので、連作ほ場では次のいずれかで防除する。

①アグロスリン乳剤、アディオン乳剤、パーマチオン水和剤は8月下旬～9月上旬に1回散布する。

②サイアノックス剤、トレボン剤、プレバソフロアブル5などは9月上旬に1～2回散布する。

イ、薬剤は莢によく付着するように散布する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|--------------|---------|---------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 7. ダイズサヤタマバエ | — | 多い（前年並） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、前年の収穫期の被害粒率は高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、着莢期にアルバリン剤・スタークル剤、スミチオン乳剤、トレボン乳剤で防除する。

イ、薬剤は莢によく付着するように散布する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|------------------------|---------|------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 8. 食葉性鱗翅目幼虫 （ツメクサガ） | — | 多い（前年より多い） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、7月下旬のえだまめ巡回調査における発生茎率は10.8%（平年1.4%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、本種は年2回発生する。第2世代幼虫は8月に発生し、葉ばかりでなく莢も食害する。

イ、幼虫の発生初期にエルサン乳剤、トレボン乳剤、フェニックスフロアブルのいずれかを散布する。老齢期になると防除効果が劣るので若齢期に散布する。

C ねぎ（夏どり）

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|------------|---------|------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 1. 黒斑病・葉枯病 | — | 多い（前年より多い） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月4半旬の巡回調査における発病株率は9.2%（平年4.2%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、降雨が続くと発病しやすいので予防や発病初期の防除に努める。

イ、肥料切れや生育後期など草勢が衰えてくると多発するので注意する。

ウ、べと病やさび病の病斑跡や害虫の食害痕に二次的に感染する場合がありますので注意する。

エ、本両病害は病徴観察による識別が困難であるため、両方に効果のある薬剤であるアミスター20フロアブル、ダコニール1000、テーク水和剤、パレード20フロアブルなどに展着剤を加用して散布する。その際は収穫前日数に注意する。また、アミスター20フロアブルは近接散布するとねぎを湾曲させる薬害を生じる場合がありますので、散布間隔を2週間以上とする。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------------------|---------|-------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 2. アザミウマ類 (ネギアザミウマ) | — | 多い (前年より多い) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (/+)。

イ、7月4半旬の巡回調査における食害株率は28.4% (平年24.6%) でやや高かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発すると防除効果が劣るので、発生初期から、アドマイヤー顆粒水和剤、アルバリン顆粒水溶剤・スタークル顆粒水溶剤、スピノエース顆粒水和剤、ダントツ水溶剤、ディアナSC、ファインセーブフロアブルなどを茎葉散布、または、ダントツ粒剤を株元散布する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|-------------|---------|-----------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 3. ネギハモグリバエ | — | 平年並 (前年並) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (/+)。

イ、7月4半旬の巡回調査における食害株率は4.8% (平年15.6%) でやや低かった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発すると防除効果が劣るので、発生初期から防除する。

イ、ネギアザミウマとの同時防除に努める。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|--------------|---------|-----------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 4. シロイチモジヨトウ | — | やや多い (前年よりやや多い) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発すると防除効果が劣るので、発生初期からアグロスリン乳剤、アタブロン乳剤、アディオ乳剤、カスケード乳剤、ゼンターリ顆粒水和剤、ノーモルト乳剤などを収穫前日数に注意して散布する。

D ねぎ（秋冬どり）

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|------------|---------|------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 1. 黒斑病・葉枯病 | － | 多い（前年より多い） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月4半旬の巡回調査における発病株率は5.8%（平年0.8%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ねぎ（夏どり）に準じる。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|--------------------|---------|--------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 2. アザミウマ類（ネギアザミウマ） | － | やや多い（前年より多い） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、7月4半旬の巡回調査における食害株率は5.8%（平年17.4%）で低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ねぎ（夏どり）に準じる。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|-------------|---------|---------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 3. ネギハモグリバエ | － | 平年並（前年よりやや多い） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、7月4半旬の巡回調査における食害株率は5.2%（平年14.7%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ねぎ（夏どり）に準じる。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|--------------|---------|----------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 4. シロイチモジヨトウ | － | やや多い（前年よりやや多い） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ねぎ（夏どり）に準じる。

E きゅうり

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|---------|---------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 1. ベと病 | — | 平年並（前年よりやや多い） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月4半旬の巡回調査における発病株率は20.3%（平年17.1%）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、草勢が衰えると発病しやすくなるので草勢の維持に努める。

イ、風雨などにより損傷した茎葉の整理を行い、発病前に予防剤を散布する。

ウ、発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル、ベトファイター顆粒水和剤、ホライズンドライフロアブルなどの治療効果がある薬剤を散布する。

エ、薬害防止のため、アミスター20フロアブルは浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用を避ける。

オ、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|----------|---------|--------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 2. うどんこ病 | — | やや多い（前年より多い） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月4半旬の巡回調査における発病株率は0.9%（平年0.2%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル、E B I 剤（サプロール乳剤など）、ポリオキシシンAL水和剤、ポリバリン水和剤、パルミノなどの治療効果のある薬剤を葉の表裏にかかるとともに散布する。

イ、薬害防止のため、アミスター20フロアブルは浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用を避ける。

ウ、耐性菌出現回避のため、同一系統薬剤の連用を避ける。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|---------|----------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 3. 褐斑病 | — | 平年並（前年並） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、7月4半旬の巡回調査における発病株率は0%（平年1.5%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病した葉は早めに取り除き、ほ場外で処分する。

イ、発生後の防除は効果が劣るので、発病前からシトラノフロアブル、ジマンダイセン水和剤、セイビアーフロアブル20、ダコニール1000などの予防剤を中心に散布する。発病を確認した場合は、スミブレンド水和剤などの治療効果がある薬剤を散布する。

ウ、ベンゾイミダゾール系剤、SDHI剤、QoI剤では耐性菌が確認されているため、防除しても効果が低い場合は異なる系統の薬剤を選択し、散布する。また、同一系統薬剤の連用を避ける。

エ、降雨により発病が助長されるため、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は薬剤の散布間隔を短くする。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|----------|---------|--------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 4. 灰色かび病 | — | 平年並（—） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多湿時に発生しやすいので、ハウス内の換気に努める。

イ、発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル、スミブレンド水和剤などの治療効果のある薬剤を散布する。

ウ、薬害防止のため、アミスター20フロアブルは浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用を避ける。

エ、耐性菌出現回避のため、同一系統薬剤の連用を避ける。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|----------|---------|--------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 5. 斑点細菌病 | — | やや多い（前年より多い） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、7月4半旬の巡回調査における発病株率は5.9%（平年7.0%）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病した葉、茎、果実は早めに除去し、ほ場外で処分する。

イ、銅剤又はその混合剤により防除に努める。

ウ、降雨により発病が助長されるため、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は薬剤の散布間隔を短くする。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|---------|-------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 6. 炭疽病 | — | 平年並（前年より多い） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、7月4半旬の巡回調査における発病株率は0%（平年2.0%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病した葉、茎、果実は早めに除去し、ほ場外で処分する。

イ、予防散布に努める。発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル、ゲッター水和剤などの治療効果がある薬剤を散布する。

ウ、薬害防止のため、アミスター20フロアブルは浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用を避ける。

エ、降雨により発病が助長されるため、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は薬剤の散布間隔を短くする。

オ、耐性菌出現回避のため、同一系統薬剤の連用を避ける。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|------------------------|---------|----------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 7. アブラムシ類 (ワタアブラムシ) | — | やや多い（前年よりやや多い） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、7月4半旬の巡回調査における発生株率は10.4%（平年10.1%）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、定期的に薬剤を散布する。

イ、抵抗性出現回避のため、同一系統薬剤の連用を避ける。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------------|---------|--------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 8. ワタヘリクロノメイガ | — | 平年並（前年より少ない） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、7月4半旬の巡回調査における食害株率は0%（平年0.8%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、初期被害を早期に発見し、若齢幼虫期に防除する。

イ、発生が多いときは、アフーム乳剤、コテツフロアブルなどで防除する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|--------------------------|---------|---------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 9. コナジラミ類 (オンシツコナジラミ) | — | やや多い（-） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、摘葉後、残さを早期に処分する。

イ、発生が多いときは、アディオン乳剤、モスピラン顆粒水溶剤などで防除する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|------------|---------|----------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 10. アザミウマ類 | — | やや多い (—) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、周辺雑草の除草を徹底する。

イ、発生が多いときは、アーデント水和剤、コテツフロアブル、モスピラン顆粒水溶剤などで防除する。

F トマト

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|----------|---------|------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 1. 灰色かび病 | — | やや少ない(前年並) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、7月中旬の巡回調査における発病株率は0% (平年0.5%) でやや低かった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多湿時に発生しやすいので、ハウス内の換気に努める。

イ、発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。

ウ、発病前からの予防散布に努める。ただし、ベンゾイミダゾール系剤、ジカルボキシイミド系剤は耐性菌が確認されているため、薬剤の選択に注意する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|---------|---------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 2. 葉かび病 | — | やや多い (前年より多い) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、7月中旬の巡回調査における発病株率は32.1% (平年2.9%)、発病度は8.0 (平年0.7) とほ場間差はあるが高かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多湿時に発生しやすいので、ハウス内の換気に努める。

イ、発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。

ウ、発病前からの予防散布に努める。ただし、耐性菌出現回避のため同一系統薬剤の連用を避ける。

| 病虫害名 | 予報内容 | |
|---------------|------|------------|
| | 発生時期 | 発生量 |
| 3. ヒラズハナアザミウマ | — | 多い（前年より多い） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、北秋田市予察ほにおける7月中旬の青色粘着板への誘殺数は1,492頭（平年289頭）で多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ハウス周辺の雑草地は発生源となるため除草に努める。

イ、被害果の摘果を行う。

ウ、スピノエース顆粒水和剤、ベストガード水溶剤、モスピラン顆粒水溶剤などを花房に付着するよう丁寧に散布する。ただし、抵抗性出現回避のため同一系統薬剤の連用を避ける。

| 病虫害名 | 予報内容 | |
|-----------|------|------------|
| | 発生時期 | 発生量 |
| 4. オオタバコガ | — | 多い（前年より多い） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、秋田市防除適期決定ほにおける7月1～4半旬のフェロモントラップへの誘殺数は4頭（平年1.2頭）で多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害痕を発見したら、幼虫が近くに潜んでいるので注意深く観察し、捕殺する。

イ、初期被害を早期に発見し、若齢幼虫期に防除する。

5. その他病虫害の発生予報と防除対策

| 病虫害名 | 発生時期 | 発生量 | | 防除上注意すべき事項 |
|----------------------------------|------|-----|-----|---------------------|
| | | 現況 | 予想 | |
| 疫病 | — | 平年並 | 平年並 | 防除が必要な場合は少ないと見込まれる。 |
| アブラムシ類 (リタアブラムシ) (モアアブラムシ) | — | 平年並 | 平年並 | 防除が必要な場合は少ないと見込まれる。 |

G えだまめ

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|---------|----------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 1. ベと病 | — | 平年並（前年並） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、汚損莢の防除において、1回散布では開花日から開花3日後散布の効果が高い。

イ、フェスティバルC水和剤、ランマンフロアブル、ライメイフロアブル、レーバスフロアブルを散布する。

ウ、降雨が続くと予想される場合は、薬剤を株元や葉裏にかかるように丁寧に散布する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|----------|---------|------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 2. ツメクサガ | — | 多い（前年より多い） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、7月下旬の巡回調査における発生茎率は10.8%（平年1.4%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、幼虫の発生初期にトレボン乳剤、フェニックスフロアブルを散布する。老齢期になると防除効果が劣るので若齢期に散布する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|--------------|---------|----------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 3. ダイズサヤタマバエ | — | やや多い（前年よりやや多い） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、着莢期にアルバリン顆粒水溶剤・スタークル顆粒水溶剤、スミチオン乳剤、トレボン乳剤を散布する。

イ、中晩生品種では開花日10日後頃に1回、晩生品種では開花日7日後頃および14日後頃の2回、アルバリン顆粒水溶剤・スタークル顆粒水溶剤を散布することにより、被害莢率を低くすることができる。

※開花日：ほ場全体で50%程度の開花が確認された日とする。

ウ、薬剤は莢によく付着するように散布する。

H りんご

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|----------|---------|--------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 1. 斑点落葉病 | — | やや多い（前年より多い） |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、7月の巡回調査における発病葉率は3.6%（平年1.5%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。
- イ、高温・多雨の多発条件下では、ポリオキシソール水和剤、ロブルール水和剤、ユニックス顆粒水和剤47のいずれかを主剤に加用して散布する。なお、これらの薬剤は年間1回の使用とする。ただし、ポリオキシソール水和剤の効力低下がみられる園地では同剤を使用しない。
- ウ、QoI剤は耐性菌出現回避のため、年間2回以内の使用とする。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|---------|----------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 2. 黒星病 | — | やや少ない（-） |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
 - イ、7月の巡回調査における発病地点率は4.5%（平年21.2%*）で低かった（ /-）。
- ※過去3年間の平均

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、7月11日発行の防除対策情報第4号を参照する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|---------|------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 3. 炭疽病 | 平年並（-） | やや少ない（前年並） |

(1) 予報の根拠

- ア、りんごの生育は概ね平年並に推移している（±/ ）。
- イ、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- ウ、7月の巡回調査における発病果率は0%（平年0%）で平年並であった（ /±）。
- エ、7月上中旬の降水量がかなり少ない～平年並であったことから感染量はやや少なかったと推定される（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、ニセアカシアは伝染源となるため、園地の近くにある木は伐採する。
- イ、二次感染防止のため、発病果は直ちに摘み取り、土中に埋める。
- ウ、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。
- エ、QoI剤は耐性菌出現回避のため、年間2回以内の使用とする。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|---------|--------|
| | 感 染 時 期 | 感 染 量 |
| 4. 輪紋病 | — | 平年並（—） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、枝幹のいぼ病斑は削り取り、トップジンMペーストを塗布する。本剤の総使用回数（3回）に注意する。

イ、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

ウ、QoI剤は耐性菌出現回避のため、年間2回以内の使用とする。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|---------|----------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 5. 褐斑病 | — | 平年並（前年並） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月の巡回調査における発病新梢率は0%（平年0%）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

イ、多発が予想される場合は、8月上旬にトップジンM水和剤又はベンレート水和剤を主剤に加用して散布する。なお、トップジンM水和剤、ベンレート水和剤は耐性菌出現回避のため、年間1～2回の使用とするが、これらの効力が低下している園地では、ユニックス顆粒水和剤47を主剤に加用して散布する。

ウ、QoI剤は耐性菌出現回避のため、年間2回以内の使用とする。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|-------------------------|---------|--|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 6. シンクイムシ類 （モモシンクイガ） | — | 県北部：平年並（前年よりやや多い） 県中央部・県南部：平年並（前年並） |

(1) 予報の根拠

ア、鹿角市予察ほにおける6月1半旬～7月4半旬のフェロモントラップへの総誘殺数は160頭（平年42頭）で多かった（ /+）。

イ、大館市防除適期決定ほにおける6月1半旬～7月4半旬のフェロモントラップへの総誘殺数は14頭（平年25頭）でやや少なかった（ /-）。

ウ、7月の巡回調査における県中央部・県南部の被害果率は0%（平年0.0%）でやや低かった（ /-）。

エ、横手市予察ほにおける7月5半旬のフェロモントラップへの誘殺数は25頭（平年4頭）で多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害果は直ちに摘み取り、6日以上水漬けする。

イ、成虫の飛来や産卵が多い園地では直ちに薬剤防除を行う。ただし、有機リン剤を使用する際は早生品種や中生品種の収穫予定日を十分に考慮する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|----------|---------|---------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 7. ナミハダニ | — | 多い（前年並） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、7月の巡回調査における1葉当たりの発生頭数は1.4頭（平年0.1頭）で多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生が多い園地では、コロマイト乳剤、ダニゲッターフロアブルなどを散布する。

イ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、殺ダニ剤は1薬剤1年1回使用、かつ同一系統又は作用点が同一の殺ダニ剤は年間1回使用として、効力低下を防止する。

ウ、コロマイト乳剤は薬害（黄変落葉）が発生するおそれがあるため高温時には使用しない。また、薬害（葉の黄変、葉裏の褐変）が発生するおそれがあるため、本剤とストライド顆粒水和剤又はスミチオン水和剤40は混用しない。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|-----------|---------|----------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 8. リンゴハダニ | — | 平年並（前年並） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、7月の巡回調査における1葉当たり発生頭数は0頭（平年0.0頭）でやや少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生が多い園地では、コロマイト乳剤、スターマイトフロアブル、ダニゲッターフロアブル、ダニコングフロアブルなどを散布する。

イ、リンゴハダニのみ発生している園地では、サンマイト水和剤、ダニサラバフロアブル、ピラニカ水和剤のいずれかを散布する。なお、使用する際は早生品種の収穫予定日を十分に考慮する。

ウ、ダニサラバフロアブルとアリエッティC水和剤又はカルシウム剤を混用する場合は、凝集を回避するため、先にダニサラバフロアブルを希釈し、よく攪拌する。

エ、スターマイトフロアブルとアリエッティC水和剤又はベフラン液剤25を混用する場合は、凝集を回避するため、先にスターマイトフロアブルを希釈し、よく攪拌する。

オ、その他の注意事項はナミハダニの項を参照する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------------------------------|---------|----------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 9. 果樹カメムシ類 (クキカメムシ、チャバネカメムシ) | — | 平年並 (前年よりやや多い) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ、7月の巡回調査における被害果率は0.0% (平年0.1%) でやや低かった (/-)。

ウ、防除適期決定ほ (4か所) における7月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の総誘殺数は59頭 (平年130頭) で平年並であった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内への飛来時期は年次変動が大きく、飛来数は地域によって異なるため、飛来状況を良く確認する。新成虫の加害は山間部や林地に隣接する園地が多いため特に注意する。

イ、園内への飛来が見られる場合は、ネオニコチノイド剤、有機リン剤、合成ピレスロイド剤のいずれかを散布する。

ウ、スプラサイド水和剤及びスミチオン水和剤40の使用時期は収穫30日前までなので、使用する際は早生品種や中生品種の収穫予定日を十分に考慮する。

エ、アルバリン顆粒水溶剤とスタークル顆粒水溶剤は同一成分の薬剤であるため、総使用回数に注意する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|-------------------------|--------------------|------------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 10. キンモンホソガ (第4世代幼虫) | やや早い (前年よりやや早い) | やや多い (前年より多い) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (-/+)。

イ、7月の巡回調査における被害葉率は0.1% (平年0.3%) で平年並であった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害葉は集めて焼却するか土中に埋める。

イ、防除適期は、県北部が8月4～5半旬、県中部・県南部が8月3～4半旬と見込まれる。

11. その他病害虫の発生予報と防除上注意すべき事項

| 病害虫名 | 発生時期 | 発生量 | | 防除上注意すべき事項 |
|--|------|-----|-----|---------------------|
| | | 現況 | 予想 | |
| ハマキムシ類 (リンゴコクモンハマキ) (リンゴモンハマキ) (第2世代幼虫) | — | やや少 | やや少 | 防除が必要な園地は少ないと見込まれる。 |

I なし（日本なし）

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|---------|----------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 1. 黒星病 | — | 平年並（前年よりやや少ない） |

（1）予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、7月中旬の巡回調査における果そう葉の発病葉率は0.16%（平年0.14%）、発病果率は0.23%（平年0.21%）でいずれも平年並であった（ /±）。

（2）防除上注意すべき事項

- ア、発病部位は速やかに切除し、適切に処分する。
- イ、薬剤の散布は10日間隔で行う。降雨が続くと予想される場合は散布間隔を7日とする。
- ウ、スピードスプレーヤで防除する場合は、1列おきではなく全列を走行し、かつ低速で丁寧に散布する。薬液のかかりにくい部分に対しては当日中に手がけで補正散布する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|---------|---------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 2. 黒斑病 | — | 平年並（前年よりやや多い） |

（1）予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、7月中旬の巡回調査における新梢の発病葉率は5.56%（平年7.79%）で平年並であった（ /±）。

（2）防除上注意すべき事項

- ア、県内で栽培されている品種では、南水、八雲で発病が多い。
- イ、徒長枝は早めに剪去し、適切に処分する。
- ウ、薬剤の散布は10日間隔で行う。降雨が続くと予想される場合又は発病の見られる園地では散布間隔を7日とする。
- エ、多発条件下では、ポリオキシシンAL水和剤を主剤に加用するか、ポリキャプタン水和剤を散布する。ただし、耐性菌出現回避のため、ポリオキシシン剤の使用は年間3回以内とする。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|---------|--------|
| | 感 染 時 期 | 感 染 量 |
| 3. 輪紋病 | — | 平年並（—） |

（1）予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

（2）防除上注意すべき事項

- ア、枝幹のいぼ病斑は削り取り、トップジンMペーストを塗布する。ただし、年間使用回数（3回）を遵守する。
- イ、薬剤の散布は10日間隔で行う。降雨が続くと予想される場合は散布間隔を7日とする。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|-------------------------|---------|----------------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 4. シンクイムシ類 (モモシンクイガ) | — | やや少ない (前年よりやや少ない) |

(1) 予報の根拠

ア、7月中旬の巡回調査における被害果率は0%（平年0%）で平年並であった（ /±）。

イ、県内4か所の防除適期決定ほにおける6月1半旬～7月4半旬の総誘殺数は、92頭（平年203頭）で少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害果は摘み取り、6日以上水漬けする。

イ、園地の周辺に放任園や防除不良園がある場合は、発生動向に注意して防除する。

ウ、モスピラン顆粒水溶剤は、長十郎、新高、八雲、愛甘水に対して薬害（葉裏に黒色斑）を発生させるおそれがあるため、これらの品種にかからないようにする。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|----------|---------|------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 5. ナミハダニ | — | 多い（前年より多い） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、7月中旬の巡回調査における1葉当たり発生頭数は0.037頭（平年0.014頭）で多く、発生地点率は36.4%（平年13.1%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、徒長枝は剪去し、適切に処分する。

イ、発生が多い園地では、コテツフロアブル、コロマイト水和剤、スターマイトフロアブル、ダニゲッターフロアブル、ダニコングフロアブル、ダニサラバフロアブルのいずれかを散布する。コロマイト水和剤は薬害（黄変落葉）が発生するおそれがあるため高温・乾燥時には使用しない。

ウ、コテツフロアブルの効力低下がみられる園地では本剤を使用しない。

エ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、殺ダニ剤は1薬剤1年1回使用、かつ同系統又は作用点が同一の剤は年間1回使用として、効力低下を防止する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|-----------|---------|---------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 6. リンゴハダニ | — | 平年並（前年よりやや多い） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、7月中旬の巡回調査における1葉当たり発生頭数は0頭（平年0.0頭）でやや少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、徒長枝は剪去し、適切に処分する。

イ、発生が多い園地では、コロマイト水和剤、スターマイトフロアブル、ダニゲッターフロアブル、ダニコングフロアブル、ダニサラバフロアブル水和剤のいずれかを散布する。コロマイト水和剤は薬害（黄変落葉）が発生するおそれがあるため高温・乾燥時には使用しない。

ウ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、殺ダニ剤は1薬剤1年1回使用、かつ同系統又は作用点が同一の剤は年間1回使用として、効力低下を防止する。

| 病虫害名 | 予報内容 | |
|-----------------------------------|------|--------------|
| | 発生時期 | 発生量 |
| 7. 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ、チャバネオカメムシ) | — | やや多い(前年より多い) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+ ）。

イ、7月中旬の巡回調査における被害果率は0%（平年0.0%）でやや少なかった（ /- ）。

ウ、県内4か所の防除適期決定ほにおける7月1～4半旬のチャバネオカメムシフェロモントラップのカメムシ類の総誘殺数は125頭（平年67頭）でやや多かった（ /+ ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内への飛来時期は年次変動が大きく、飛来数は地域によって異なるため、飛来状況をよく観察する。新成虫の加害は山間部や林地に隣接する園地が多いため特に注意する。

イ、園内への飛来が見られる場合は、ネオニコチノイド剤、有機リン剤、合成ピレスロイド剤のいずれかを散布する。ただし、有機リン剤を使用する際は早生～中生品種の収穫予定日を十分に考慮する。

ウ、アルバリン顆粒水溶剤とスタークル顆粒水溶剤は同一成分の薬剤であるため、総使用回数に注意する。

8. その他病虫害の発生予報と防除対策

| 病虫害名 | 発生時期 | 発生量 | | 防除上注意すべき事項 |
|---|------|-----|-----|---------------------|
| | | 現況 | 予想 | |
| ハマキムシ類 (リンゴコカクモンハマキ) (リンゴモンハマキ) (第2世代幼虫) | — | 平年並 | 平年並 | 防除が必要な園地は少ないと見込まれる。 |

J ぶどう

| 病虫害名 | 予報内容 | |
|--------|-----------|----------|
| | 発生時期 | 発生量 |
| 1. ベと病 | やや遅い(前年並) | 平年並(前年並) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /± ）。

イ、7月中旬の巡回調査における発病葉率は0%（平年0%）、発病房率は0%（平年0%）でいずれも平年並であった（ /± ）。

ウ、横手市予察ほにおける初発は7月26日現在確認されていない（平年7月22日）（ +/ ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、袋かけ以降に散布する薬剤は、コサイド3000、ホライズンドライフロアブル、ボルドー剤のいずれかとする。ただし、使用する際は収穫予定日を十分に考慮する。

イ、ホライズンドライフロアブルは耐性菌出現回避のため年間1回の使用とし、かつQoI剤との連用は避ける。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|----------|---------|-----------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 2. 灰色かび病 | — | やや多い (前年よりやや多い) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、7月中旬の巡回調査における新梢葉の発病葉率は、キャンベル・アーリーが0% (平年0.37%)、巨峰は0% (平年0.59%) でいずれもやや低かった。発病果房率は、キャンベル・アーリーが0.67% (平年0.19%) で高く、巨峰は0% (平年0.44%) でやや低かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病葉や発病果房は摘み取り、適切に処分する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|------------|-----------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 3. 晩腐病 | やや早い (前年並) | 平年並 (前年並) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、ぶどうの成熟期は平年より早いと見込まれる (-/)。

ウ、6月上旬の巡回調査における発病果房率はキャンベル・アーリーが0% (平年0.1%)、巨峰が0% (平年1.0%) でいずれも平年並であった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病した果粒は摘み取り、適切に処分する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|----------------|---------|-----------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 4. チャノキイロアザミウマ | — | やや多い (前年よりやや多い) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ、7月中旬の巡回調査における被害果房率はキャンベル・アーリーが0% (平年0.01%)、巨峰が0% (平年0.03%) でいずれも平年並であった (/±)。

ウ、防除適期決定ほ (2か所) における7月1～4半旬の総誘頭数は21頭 (平年31頭) で平年並であった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、例年被害の多い園地では、ネオニコチノイド剤、合成ピレスロイド剤、ディアナWDG、エクシレルSEのいずれかを散布する。ただし、使用する際は収穫予定日を十分に考慮する。
イ、合成ピレスロイド剤の使用は年間1～2回にとどめる。

IV. 気象予報

令和元年7月25日仙台管区気象台発表 東北地方1か月予報（7月27日～8月26日）

(1) 予想される向こう1か月の天候

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

東北日本海側では、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。東北太平洋側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率60%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、高い確率50%です。

(2) 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（東北地方日本海側）

| | 低い（少ない） | 平年並 | 高い（多い） |
|------|---------|-----|--------|
| 気温 | 10% | 30% | 60% |
| 降水量 | 40% | 30% | 30% |
| 日照時間 | 30% | 30% | 40% |

(3) 気温経過の各階級の確率

| | 低い | 平年並 | 高い |
|-----------|-----|-----|-----|
| 7/27～8/2 | 10% | 10% | 80% |
| 8/3～8/9 | 20% | 30% | 50% |
| 8/10～8/23 | 30% | 30% | 40% |

V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～7月5半旬 秋田県農業気象システムより)

気温℃



降水量ミリ



日照時間



VI. 用語の説明

発生時期

平年の発生日からの差を5段階評価で予測します。

| | | | | | | | | | | | | | |
|----|-----|------|----|-----|----|----|-----------|------|----|----|----|----|-----|
| 日数 | ~-6 | -5 | -4 | -3 | -2 | -1 | 平年 発生日 | +1 | +2 | +3 | +4 | +5 | +6~ |
| 評価 | 早い | やや早い | | 平年並 | | | | やや遅い | | 遅い | | | |

発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

| | | | | | | |
|----|----------|-------|-----|-----|------|-----|
| | 平年値 ↓ | | | | | |
| 度数 | 10% | 20% | 20% | 20% | 20% | 10% |
| 評価 | 少ない | やや少ない | 平年並 | | やや多い | 多い |

予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期が「遅い」場合は「+」、「早い」場合は「-」となります。発生量が「多い」場合は「+」、「少ない」場合は「-」となります。

発生時期、発生量ともに、「平年並」の場合は「±」、関係しないときは「空欄」となります。

気象の確率予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50%以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50%以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20%で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40%の場合は「平年並か高い（多い）」、高い（多い）と平年並が40%で低い（少ない）が20%の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30~40%の場合は「ほぼ平年並」となります。

| 出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い)) | 解説 |
|----------------------------------|-------------|
| 高い(多い)確率が50%以上 | 高い(多い) |
| (20:40:40) | 平年並か高い(多い) |
| 平年並の確率が50%以上 | 平年並 |
| (40:30:30) (30:40:30) (30:30:40) | ほぼ平年並 |
| (40:40:20) | 平年並か低い(少ない) |
| 低い(少ない)確率が50%以上 | 低い(少ない) |

半月のとり方

ここで扱われる「半月」とは暦日半月のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半月は1日から5日まで、2半月は6日から10日までであり、以降6半月まで5日ごとに該当する期間を指します。

2019年度秋田県農薬危害防止運動
～農薬を安全に正しく使いましょう！～

令和元年6月1日から8月31日まで「農薬危害防止運動」の実施期間です。
農薬の安全かつ適正な使用及び管理を徹底しましょう。

農薬の適正使用・管理の徹底を！

農薬使用にあたっては、十分注意のうえ、安全かつ適正に使用してください。

○安全使用の基本事項

- ・農薬の使用基準を遵守する。
- ・病虫害の発生状況を把握し、必要最小限の農薬を使用する。
- ・防除履歴を必ず記録する。

○農薬使用上の注意

- ・農薬の散布時には周辺作物に飛散（ドリフト）させない。
- ・家畜・蜜蜂等に影響のある農薬を使用する場合は、地域内の畜産農家及び養蜂業者と緊密に連携し、散布日時や散布地域、使用農薬の種類等を散布前に十分周知する。
- ・農薬散布後は散布器具の洗浄を徹底する。
- ・特に、土壌くん蒸剤は使用上の注意事項を遵守する。
- ・農薬散布時の装備と体調は万全にする。

○農薬の取扱い上の注意

- ・農薬は保管庫に入れ、施錠して保管する。
- ・農薬を他の容器（清涼飲料水の容器等）へ移し替えない。